
私の牙と彼女のディナー

seiO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私の牙と彼女のディナー

【Nコード】

N6143D

【作者名】

seilO

【あらすじ】

思春期を迎えた少女の、性に対する興味と暴走

私に牙が生えたのは、初潮を迎えて3年目の生温い夜だった。
尖った月は、居心地が悪いのか姿を隠し、膨れた雲が、それでも星を食べ続けていた夜遅く。

排泄場所がわからない成人男子を横目に、食後の滑った唇が原始的な女性が、デザートか、または先ほど食べたのは前菜で、メインディッシュなのかはわからないが、それらにあたるであろう食事を、目を血走らせながら探していた。

「…こんな時間に何してんの？早く家に帰りな。似合ってないよ」

彼女の目から生氣が抜けた。先ほどまで滑っていた唇が渴き始めるのを見守っていた私に気付कि、そっと手招いて見せた。

「…家出？…早く帰んな。私みたいになるよ、あはは…」

低い笑い声と垂れた目尻がアンバランスに見えて、そして同時に再び目を血走らせた彼女に、違和感と既視感を覚えて手が汗ばんだ。

相変わらず雲は太り続け、食べかすのような星も消えかけた頃、彼女はその雲によく似た食事に取りつけたようだった。

「…早く帰んなー。あんたにはまだ早いよ。味もわかんないうちは大事にしときな」

もう朝が近いのだろうか。

黒い猫が輪郭を取り戻し始めて擦り寄って来た。辺りは知ってる匂いが立ち込めて、その匂いのもとが、夜露を纏った誰かの家の生け垣からだと言うことを、視覚からも確認することが出来るようになっていた。

私は、生え始めた牙とさつき彼女に感じた既視感が、近い将来必ず繋がるような気がして、安堵したと同時に胸がたかかった。

彼女がいつかの私なら、今は時期じゃない。

彼女は知っていた。生え始めたばかりの牙じゃ、うまいもまずいもわからないこと。

どうせ食べるなら、立派に育った牙で思い切り噛み付きたい。その方が肉汁もたっぷり出てうまいだろう。

家に帰る道なりで、霧雨が降ってきた。空を見上げると、伸びきった曇り空がただ拡がっているだけだった。

彼女もこんな汗を浴びながら、フルコースを堪能したのだろうか。

家に着くなり、近い将来必ず会うだろう彼女を思って、私は自分の部屋で牙を研いだ。

また雨が降ったら、月も星も見えない夜に、彼女に会いに行こうか。

牙を研いだ事、誉めてくれるだろうか。

おわり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6143d/>

私の牙と彼女のディナー

2011年10月4日19時21分発行